

# 児童の伝え合う力を育てる指導

－新聞作りと伝え合い活動を通して－

M11EP006

三枝 幸

## 1 はじめに

### (1) 主題設定の理由

#### ①児童の実態から

本学級の児童の実態として、自分の思いや考えをしっかりと持ち、それをわかりやすく伝え、互いの思いや考えを聞いて受け止めフィードバックするといった「伝え合う力」が乏しいことが課題に挙げられる。これまで朝の会や各教科の学習の中で、話題に沿ったスピーチをする活動を経験しているが、そのほとんどが一問一答の質問と応答に終始し、話題の広がりが少ないことが多かった。全体の前で話すことに緊張し、苦手意識を持つ児童も多い。また、相手意識をしっかりとらずに一方的に話す児童や、相手の話に共感的に耳を傾けたり、相手の思いや考えを受け止め理解したりすることを苦手としている児童も多い。話の中心を意識しながら聞いたり、話したりすることが不十分であることがその理由と考える。相手の話を受けて、自分の考えや思いをもち、それについて多くの友だちと意見を交えることで、互いの考えや思いの違いに気づき、その違いを認め合うことで、コミュニケーションが活発化し、豊かな人間関係が育っていくと考える。

#### ②近年の教育の現状から

情報化や国際化が進む現代、人々の価値観が多様化してきている。このような社会で求められているのは、よりよい人間関係を築きながら主体的に生きる力であり、よりよい人間関係を築くためのコミュニケーションに必要な力として「伝え合う力」の育成が注目されている。新小学校学習指導要領国語では「伝え合う力を高める」ことが目標に挙げられ、同解説国語編(平成20年8月)において「伝え合う力」は、「表

現力と理解力とを育成するとともに、人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重してはぐくむこと」と位置づけている。相手の話に耳を傾け、自分と違った考えや意見を受け止めて理解しながら相手に話すだけでなく、相手に質問し受けて返すといった主体的に「伝え合う力」は、実生活のさまざまな場面で必要な力であり、これから生きる子どもたちに不可欠な力であるといえよう。

一方、現代の情報化社会において、さまざまな情報の中から自分で必要な情報を得る主体的な態度を育てることが必要となる。同時に、学習を通じて得たことを、自分なりに工夫して周囲に発信し、「伝え合う力」を高めていくことも、大切になると考える。新学習指導要領には、新聞の活用が盛り込まれている。言語活動を充実させるための教材として、新聞の活用が多く例示され、社会や理科など各教科でも、情報収集の手段や表現方法の例として新聞が取り上げられている。新聞は本来、「伝える」機能を持っている。この機能に焦点を当てて新聞を活用することにより、伝え合う力の育成に寄与することができると思われる。よって、新聞作りの活動は、子どもたちの「伝え合う力」を育むのに適した教材と言えるだろう。しかしながら、学校現場では、教師の多忙化が進み、日々新しく変わるニュースを授業に取り入れたり、新聞作りを学習計画に取り入れる余裕が十分でないのが現状である。そこで、新聞作りを計画的に教育課程に取り入れる試みから、児童の「伝え合う力」を育んでいきたいと考えた。

### (2) 研究主題・副題について

#### ①「伝え合う力」について

木下(2006)は、伝え合う力として次の3つを

示している。

- ◎児童自身が今どのように感じているのかという  
ことを適切な言葉で表現する力
- ◎相手の言葉を適切に受け取る力
- ◎話し合いによってよりよい問題解決を図る力

つまり、「伝え合う力」とは、他者の考えなどを正確に理解したり、自分自身の考えを適切に表現したりする上でも、豊かな人間関係を構築するためにも重要な力であると捉えられる。

また、伝え合う力の提唱者である小森(1999)が「生きて働く国語の力は、自分と相手、相手と自分という人間の中でこそ育成できるものである」と述べている通り、相手意識を持つことにより、自分の学習をメタ認知することができる。自分の考えや感想を聞き手に伝え、また相手の気持ちを考える過程がなければ、「伝え合い」は成り立たない。話し合う、助言し合う、発表し合うなど伝え合う場面を意図的に設定するなど指導過程を工夫することにより、児童が友だちの考えを受け入れる中で、自分の考えをより深めることができる。授業実践において、児童らが相互交流を経て高め合う指導を工夫することにより、「伝え合う力」を育てていくことが必要になる。

ここまでの議論を踏まえて、本研究では「伝え合う力」を以下のように定義する。

- ◎発信する力（相手意識、目的意識を持って伝えようとする。伝えたいことを表現する）
- ◎受信する力（相手の言葉や表現、思いを受け止め理解し、考える）
- ◎交流する力（意見や感想を話し合い、伝え合いお互いを理解し合う）

以上から、「伝え合う力」が育った児童の姿とし、以下のような子ども像を目指していきたい。

- ・相手意識を持ち、自分の思いや考えを相手に伝えるように適切に表現できる子
- ・相手の思いを正確に受け止め、考え方や感じ方について違いがあることに気づきながら交流し合える子

## ②「新聞の活用」について

新学習指導要領では、言語活動例として小学校3・4年に「疑問に思ったことを調べて、報告する文章を書いたり、学級新聞などに表したりすること」、小学校5・6年に「編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと」と指導すべき内容として新聞が明確に位置づけられた。本研究では、新聞活用を目標にするのではなく、子どもたちに社会に目を向けさせ、学習したことを社会一般で活用されていることを確かめる手段や適切な表現方法を身に付ける手段として新聞を扱う。新聞を活用した取り組みは、よりよく伝え合う力の育成を具体化する一つの手立てとして考える。新聞から表現方法を学び、学習のまとめ、発信の手段として新聞作りを取り入れることにより、必要な情報を収集・選択し、文章で表現し、伝え合う活動が活性化するのであろうと考える。

これからの時代に求められるPISA型読解力では、「読解力(Reading Literacy)」を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」と定義している。新聞作りの学習においては、PISA型読解力で求められる多くの力、つまり、情報を取り出し、選択し、理解、考える力、活用する力、構成や表現する力、図やグラフなどを使いわかりやすく説明する力が育つことなどが期待できる。新聞を作って発信し合うことにより、友だちの思いや考えを受け止め、理解し合う活動につながり、「伝え合う力」が育まれていくと考える。

## ③「伝え合い活動」について

新学習指導要領には、言語の役割を踏まえた言語活動の充実が掲げられた。言語活動を充実した指導として、学校現場では授業に「伝え合い活動」を取り入れることが盛んになってきている。伝え合い活動には、2人組で話し合うペアトーク、グループで話し合うグループディスカッション、グループを変えながら伝え合うワ

ールドカフェなどの手法がある。ワールドカフェとは、4～5人のグループで組み合わせを変えながら話し合いや交流を行うことによって、あたかもカフェにいるような安心できる雰囲気の中で、ネットワークを築きながら場に一体感を醸成しつつ、主体的で創造的な話し合いをつくるためのファシリテーション形態の一種のことである（堀, 2012）。

ファシリテーションとは人々の活動が容易にできるよう支援し、うまくことが運ぶよう舵取りすることで、もともとビジネスの分野でグループによる会議を効率的に運営する手法として開発され応用されてきたものである。その集団による問題解決の手法を学校教育の場に取り入れたのが、堀（2012）による「教室ファシリテーション」であり、つまり、教育現場における「伝え合い活動」である。「伝え合い活動」を通して、言語でのコミュニケーションを効率的に行うことによって、「伝え合う力」が育まれていくと考える。

## 2 研究の目的

新聞作りの活動を基盤とし、伝え合い活動を通して、児童の伝え合う力を育てる指導の在り方を明らかにする。

## 3 研究仮説

- ①新聞作りを段階的に指導することにより、伝えたいことが相手に伝わるような表現の仕方が身につく、「伝え合う力」、特に発信する力が高まるであろう。
- ②授業の中において、伝え合う場を意図的に設けることにより、多様な交流を通して他者から学ぶ楽しさを感じることができ、伝え合う意欲が高まり、「伝え合う力」、特に受信する力、交流する力が育つだろう。

## 4 研究内容

### 4-1 研究内容：新聞作り活動

#### (1) 方法

- ①対象児童 公立小3年生（男16，女14）
- ②単元と指導内容  
各教科や総合的な学習の時間、学活などに新

聞作りを計画的に盛り込み、定期的に新聞作りを行った（表1）。

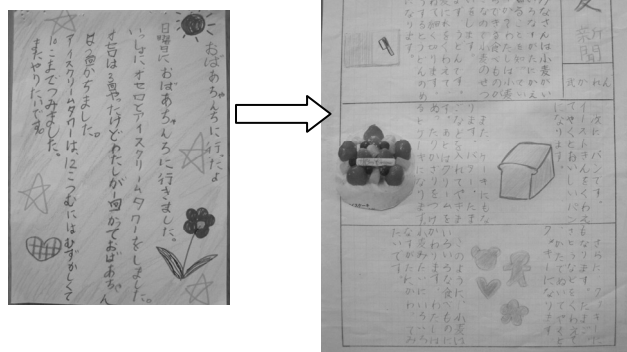
表1 小3各教科で取り組んだ新聞作り

月	教科	単元名	サイズ	指導内容
4月	学活	自己紹介をしよう	はがき	新聞の持つ意味「伝える意識」
4月	国語	春の楽しみ	はがき	一番伝えたいことから伝える
5月	社会	地区探検をしよう	はがき	イラストや絵を入れる効果
6月	国語	夏の楽しみ	はがき	言葉集め（情報収集力）、理由づけ
6月	国語	本を紹介しよう	はがき	見出しのつけ方、工夫
7月	社会	甲府市の紹介	B4	グラフや地図を入れる効果
9月	国語	秋の楽しみ	はがき	短い言葉で伝える(俳句コーナー)
10月	総合	外国博士になろう	B4	情報収集、地図の効果

学習新聞作りのほかに、週末の宿題として、「わたしの新聞」作りにも取り組んだ。児童らは、身の回りの出来事や興味を持って調べたこと、最近のニュースの紹介など自由に記述し、友だちに伝えるよう工夫をして取り組んだ。

#### (2) 結果

新聞作りでは、4月から段階を追って「一番伝えたいことから」「理由をつけて」「順序を考えて」伝えるなど、論理的に内容を構成し、組み立てる伝え方のスキルを指導してきた。継続して行ったことにより、学年当初、一言日記のように書いていた児童の新聞（左）が、



2学期の中旬ごろには相手を意識して論理的な内容構成で伝え、レイアウトや見出しも工夫した新聞(右)へと変容した。

児童の新聞を見ていくと、新聞作りの活動により以下の4つの変容が見られた。

### ①伝えるスキル

新聞という限られた文字数の中に、一番言いたいことを中心に書く書き方や、見出しのたて方を指導し

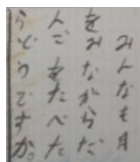


てきた。それにより、伝えたいことをコンパクトに短い言葉で表すことができるようになってきた。また、絵やグラフなどの効果を指導したことにより、イラストやグラフなどを駆使して、分かりやすく伝えることができるようになり、自分なりにレイアウトを工夫するようになった。

新聞作りの指導により、伝えたいことを分かりやすく表現する力がついてきたと言えるだろう。これらの力は、新聞などで書く力にとどまらず、話して伝える際にも伝え合いのスキルとして使うことができるようになった。

### ② 伝えようとする意識

新聞作りでは、伝えようとする相手を意識して書くように指導してきた。今まで情報の受け手だった児童が相手意識を持ち送り手となる体験をすることにより、呼びかけるような書き方をするなど主体的に伝えようという意識が芽生えてきた。「秋の楽しみ」の単元では、「秋といえばお月見だんご」と主張した児童は最後に「みんなも月を見ながらだんごを食べたらどうですか?」と締めくくった。



また、「甲府市の紹介」新聞の感想コーナーに「みんなに伝わったらいいです」と書いた児童がいたように「伝わる」ように書くことを意識するようになった。これは、「書く」場面だけでなく、「話す」場面においても、相手意識を持って伝えようとする「発信する力」ができてきた

といえるのではないかと思われる。

### ③ 交流し合う力

教室に張り出した児童の作った新聞を教師が紹介していき、新聞を読む視点(内容、見出し、レイアウト等)を持たせた。これにより、友だちの新聞から参考とする点を見つけることができた。また、作成した新聞を通して意見交流し、友だちのまねをしてみるなど参考にして新聞作りに取り組む姿が見られた。

自分が書いた新聞を他者と交流し合うことによって、相手の考えを受け止め理解する「受信する力」がついてきた。また、感想を話し合う中で他者から学ぶ楽しさを感じ、お互いを理解し合う「交流する力」がついてきたといえる。

### ④ほかの資料を参照する力

個人新聞作りでは、一般紙の紙面を見せるなどして新聞作りのヒントを指導した後、児童の個性を尊重して自由に新聞作りをさせた。その結果、一般紙の紙面を切り抜いたり、4コマ漫画を描いたり、クロスワードクイズを作ったりする子が



出てくるなど、自分なりに参考となる資料からヒントを得て新聞作りに主体的に取り組むようになってきた。新聞作りに取り組んだために、自分の身近な社会から地域や国、世界の出来事にも興味を持つようになってきて、発信する内容が豊富になってきたという効果も見られた。また、学習したことが社会一般で活用されていることを確かめる手段となった。

### (3) 考察

継続して指導してきたことにより、内容面においてもスキル面においても伝え方の水準が上がり、「伝える力」ができてきたといえるのではないかと思われる。

この「伝える力」は、書く場面だけでなく、話す場面においても使えるようになり、さまざまな学習や生活の場面で「理由は～」や「理由

が〇つあります。一つ目は～」といった論理的に内容を構成した話し方がよく見られるようになった。よって、新聞作りを指導してきたことにより、「伝え合う力」の中の「発信する力」がついてきたと考える。

また、児童の情意面をみてみると、「新聞作りで工夫していることは？」という問いに対し「人気が出るような見出しを考えている」とした子がいるように、友だちに楽しんで読んでもらうことを心がけて新聞作りを楽しんでいる様子が見える。また、「写真をつけるときは、選んでどこを切って残せばよいか工夫している」「いろいろな材料を使っている」など、さまざまな情報の中から自分が伝えたいことが友だちに伝わるように情報を取り出している児童が多い。相手意識を持ち新聞作りをするという体験により、一方的に「伝える」のではなく、相互交流に発展していったように思う。

新聞作りは、ここまで述べてきたような「伝える」側面とともに読み手として「受信する」側面もある。学習から作りをしたときに「月曜日 みんなの新聞 楽しみだ」と作った児童がいるように、児童らは毎週発行している新聞を見合うのをとても楽しみにしている。興味を持って読むことで「受信する力」、また感想を言い合うことで「交流する力」もついてきたといえるだろう。よって、新聞作りは子どもたちの「伝え合う力」をつけるために有効な指導の工夫の一つであることが確かめられた。

#### 4-2 研究内容：伝え合い活動の授業実践

##### (1) 方法

- ① 対象児童 公立小3年生(男16, 女14)
- ② 単元名 「説明のしかたを考えよう」  
教材名「すがたをかえる大豆」  
(光村図書 小学3年下)
- ③ 単元の目標  
ア) 中心となる語や文をとらえ、段落相互の関係を考えながら、文章の内容を的確に理解することができる。  
イ) 内容を大きくまとめたり、必要などころは

細かい点に注意したりしながら読むことができる。

ウ) 構成や段落相互の関係に注意しながら、文章を書くことができる。

##### ④単元計画

次	時	学習内容
一	1	○説明文を書くために、「上手な説明のわざを見つけよう」という学習課題を設定する。
	2	○全文を読み、はじめて知ったことやすごいと思ったことを伝え合う。
二	3	○小見出しを考え、それぞれの段落のおおまかな内容をとらえる。
	4	○文章全体の組み立てを考える。
	5	○「中」をくわしく読み、工夫を見つける
	6	○説明の順番について考える(本時)
	7	○「おわり」をくわしく読み、説明の工夫を見つける。
三	8	○興味のある本を選んで読み、自分が調べたい食材を決める。

##### ⑤本単元で用いた手法

授業の中に「個人で考える→少人数で伝え合う→クラス全体で伝え合う」という流れを作り、児童が相互に交流し、学び合う場として「伝え合う場」を意図的に設ける。「伝える」ためには、自分の考えを持つことが前提となる。自分の考えをしっかりと持ち、小グループの友だちに伝えようとすることで、漠然とした思いが徐々に明確になっていく。グループで交流したことを全体で交流するという活動を経て、それぞれの学びの深まりへとつながると考える。本研究ではこの3ステップでの活動を「伝え合いの場」とする。少人数での話し合いは自己表現が苦手な児童にも抵抗感が少なく、考えを伝え合い、共通点や相違点を見つけやすい。よって、話し合いが活性化されるだろう。授業では、自分の考えを広げて深めるために仲間と伝え合い交流し合う場を意図的に設けることにより、伝え合う力を高めていく。

## ⑥本時の授業内容

教材文は、大豆をおいしく食べるための工夫を5つの例で説明している解説型の文章である。段落構成が明確であり、段落をつなぐ接続語が多く使われている。本時では、「次に」「また」「さらに」などの接続語の働きによって、論理の展開をとらえていくことを通して、説明する順序について考えさせていった。

本時の課題提示は、教科書の段落④～⑦の順番の④と⑥を入れ替えたものを提示して、入れ替えてよいかどうかと児童の考えを揺さぶる発問をし、考えさせた。教科書の段落は以下のような構成となっている。④いちばん分かりやすいのは(いったり煮たりする工夫)⑤次に(粉にして食べる工夫)⑥また(栄養を取りだして違う食品にする工夫)⑦さらに(小さな生物の力で違う食品にする工夫)⑧これらのほかに(取り入れ時期や育て方を変えて食べる工夫)。

本時の目標「段落の順序に注目して読み、説明のしかたを見つけることができる」に迫るために、「伝え合いの場」を指導計画の中に位置づけた。伝え合い活動はワールドカフェという手法をとった。理由は、本時の活動においては、能動的に教科書通りではない順序の可能性を探るために、自分の考えの他に他者の考えを得ることで、さらに自分の考えを再構築できると考えたからである。授業の流れとしては、伝え合いのステップ「個人で考える→グループでの交流(ワールドカフェ)→全体交流」という三段階の学習ステップを流れとする伝え合いの場を設定した。ワールドカフェによるグループでの伝え合い活動は、グループで伝え合う→他のグループの情報を得る→自分のグループに戻り比較検討して考えを構築する3ラウンドの伝え合いを行った。

### (2) 結果

以下は3つのステップに従った伝え合い活動における子どもの学びの様子である。

#### ①ステップ1：個人で考える段階

個人で自分の考えをもち、ノートに書く場面

では、これまでの学習を振り返り、本文を読み返す活動をしながら、考えている様子が見られた。一人一人が自分の考えを書くことができた。この時点での児童の考えは、教科書通りの文を選んだ児童が23人、順序を入れ替えた文を選んだ児童が6人だった。伝え合う力の要素である発信するために必要な自分の考えを持つことは、すべての児童ができた。

#### ②ステップ2：伝え合い活動により解決を図る

それぞれ自分の考えをもとにグループでの話し合いに入った。どちらを選んだかとその自分なりの理由を全員が話すことができた。グループ用のワークシートに理由・根拠を書きながら、それぞれの考えを可視化しながら進めた。グループ学習の中で友だちの意見を聞き、本文に戻って読み直すなどして考えている姿も見られた。

他の班に移動して情報を集める場面では、一人残ったリーダー(ホスト)が自分の班での話し合い結果を伝え、他グループから来た児童らは情報を聞き漏らすまいとメモしながら聞いている様子が見られた。伝えられた情報を聞いて自分たちの考えと似ている点や違う点を伝えたり、「なるほど」と思った意見にはうなづいたり、拍手をしたりする姿が見られた。

再び自分のグループに戻り、集めた情報を交流した後、グループとしての考えをまとめさせた。その結果、すべてのグループが「順番を変えない方がよい」という結論に達した。

以下、ビデオから、あるグループのプロトコルを引用し、身についた力を検討する。

A：自分の考えを言っていってください。

J：ぼくは、変えてもよいと思います。理由は、変えたら少し分かりやすくなるからです。「さらに」と変えても説明できるからです。

R：ぼくは、変えない方がよいと思います。理由は、順番的に、③④⑤⑥⑦の方がよいと思うし、変えたら話が変になるからです。

伝えたいことをはじめに言い(説明のわざで身につけた伝え方・発信する力)、その理由を

述べている（新聞作りで身につけた伝え方）。

N：私も変えない方がよいと思います。理由は、食べるのが多い順だからです。

A：だれがですか？

N：自分が、食べる順番が多いということです。

A：あー、なるほど。分かりました。

分からないことは質問して情報を得て、答えに対して反応している（受け取る・受信する力）。

A：「急に『さらに』という言葉が来るのはおかしいと思います。『さらに』は今まで説明がいっぱいあるということだから、急に『さらに』ではじまるのは変だと思います」

（発言を聞きながら、Nが拍手。一同、「あー、そうか」なるほど拍手）

J：「やっぱり、変えないだと思ふ。③だと『いちばん分かりやすいのは』と書いていて、⑥だと『さらに』と書いているから」

友だちの発言を最後まで聞いて、うなづく、話を聞いた発言をするなど反応している（受信する力・交流する力）。

J：4班さんは、変えない方がよいでした。理由が3つあって、理由1つめは読みやすいからでした。2つめは、定番順だからでした。3つめは納豆菌は意外だからです。

説明する理由に順番をつけて、話す順序の工夫して話している（発信する力・新聞作りで身につけた力）。

R：3つめは納豆菌は意外だからです。

A：はい？どういうことですか？

N：定番じゃなくて意外だからですね。

R：納豆菌は以外は、結構いい意見だと思う。

J：うん、意外は意外といい意見だ。

R・N：そう。

（A 教科書本文を読みなおして）

A：なるほど、だから、いい文だ。

友だちの発言を受けて、反応したり、自分の考えを述べたりしている（交流する力）。

### ③ステップ3：全体での意見交流

全体での意見交流の場面では、「順番を変えた方がいい」とう考えのゲストティーチャーのA先

生を説得しよう」ということで、グループの話し合い結果を伝えていった。全体での伝え合いを通した児童の感想の中に「いろいろな理由があったけど、1班の理由からいろんなことが学べた」というものがあった。全体交流を通して、学び合いも生まれたように思う。本文を根拠に、説得力ある伝え方（プロトコル1）で伝えることができ、最後に説得できたところで終了し、児童らは満足そうだった。

（プロトコル1）

わたしたちの班は変えないほうがよいに決まりました。理由は、はじめの文章に1班は注目しました。「わかりやすいのは」から「次に」「また」「さらに」「これらのほかに」と書いてあるからです。A先生の意見は、はじめのことばが成立していないから、だから、変えないほうがよいと思います。

また、他班の考えを受けて発表する伝え方（プロトコル2）で、伝え合う様子も見られた。

（プロトコル2）

ぼくたち5班は変えないほうがよいと思います。理由は、2、3、4班さんの意見と似ていて、2の次に急にさらにということばがあると変だから。さらには前に説明がたくさんあるということだからです。

自分の考えと比べて（似ている、違う）、友だちの発言を聞き、それに対して反応している（受信する力・交流する力）。

### （3）考察

段落の順番を考え、段落相互の関係を考えるという課題は、児童にとって初めての経験であり、難しいと思われた。しかし、友だちとの伝え合いの場を経て自分なりの考えを深めていく様子が見られた。「伝え合いの場」を設定したことにより、本時の目標に迫ることができたのではないかと考える。「意見がまよっていたけど、みんなの意見がわかって、ワールドカフェができてよかったです。またやりたいです」と児童の感想にあるように、多様な交流を通して、児童らは違う意見を知り、他者から学ぶ楽しさを

感じ取ることができ、伝え合う意欲が高まったと考える。授業後に行ったアンケートにおいても、「あなたは、相手にわかるように自分の考えを伝えることができますか？」という問いに対し、授業前は「うまく話せないから全くできない」と記入した児童が、授業後には「ワールドカフェがおもしろいからとてもできる」と記入するなどの変容が見られた。また、「伝え合いの活動が好きですか？」の問いに対し、「苦手だからきらい」と答えていた児童が「伝え合いの活動が大好きだからとても好き」と答えるなど、伝え合いの場を意図的に授業に組み込んだことにより、伝え合う意欲が高まったことがわかる。

よって、「伝え合いの場」の設定の工夫は、子どもたちの学びが深まっていくために有効な指導の工夫の一つであることが確かめられた。

とはいえ、逆方向の変容を見せた児童もいた。「自分の考えと比べながら、友だちの考えを聞くことができたか？」という問いに対し、授業前は「とてもできる」だったのに、授業後「まったくできない」に変容した。理由を聞くと、「友だちの考えを聞けば頭の中に入って自分の考えはもともとわかっているから」が「あまり比べられないから」となった。「友だちの考えと自分の考えを照らし合わせて伝え合うことができるか？」の問いに対しては、「みんなのはいっぱい読んだらわかって自分のはよくわかるからとてもできる」から「とてもはずかしいから」と変わった。この児童は、伝え合い活動で理由をつけた話し方ができ、友だちからも認められたRであり、はたから見ると伝え合う力が育っているように思えたが、本人は「伝え合う」ことがはずかしいと思っていることがわかった。これは、R自身が友だちと比較して自身を見るようになったことで、単なる意見の言い合いから自他の伝え方や伝える内容などに対し要求水準が高まり、伝え合いの意味が変わってきたと解釈することもできるだろう。

## 5 全体考察

研究仮説1については、新聞作りを段階的

に指導したことにより、伝えるためのスキルを身につけることができ、「発信する力」がついてきた。よって、新聞作りを継続して行うことによって、伝えたいことが相手に伝わるような表現の仕方が身に付き、「伝え合う力」が高まったといえるだろう。

研究仮説2については、授業の中において、伝え合いの場を意図的に組み入れたことにより、友だちの考えを聞いて考えるという受信する力がついた。また、多様な伝え合い活動による交流を通して他者から学ぶ楽しさを感じ、交流する力がついたといえる。

したがって、新聞作りの活動の継続化と伝え合い活動の実践は、児童の伝え合う力を育てるのに有効な指導の一つといえることが明らかになった。

## 6 課題

本研究では、勤務校の小学3年生における新聞作りについて教育課程に盛り込む提案を行った。今後は、学校全体の取り組みとして、他の学年との系統性を持った指導計画を考えていく必要がある。

「伝え合い活動」については、言語活動を重視しすぎると、「伝え合い活動」自体が目的の授業になってしまう恐れがある。ねらいを明確にした上で伝え合い活動を行うことが大切である。今後は、児童の「伝え合う力」を高めるための教材開発や単元や児童の実態に合った「伝え合い活動」を考えていきたい。

<参考・引用文献>

- ・小学校学習指導要領, 文部科学省, 平成20年
- ・読解力向上に関する指導資料—PISA調査(読解力)の結果分析と改善の方向—文部科学省, 平成17年
- ・木下美和子(2006)「伝え合う力」を育てる国語科授業の創造, 明治図書
- ・小森茂(1999)「伝え合う力」の育成と音声言語の重視, 明治図書
- ・堀裕嗣(2012)「教室ファシリテーション10のアイテム100のステップ」, 学事出版